

忘れられた叡智を求めて

第7回

東 日本大震災。三万人にも及ぶ方々が命を失った、

この大震災と大津波。

それは、なぜ起こったのか。

それは、日本が地震国であったから、日本が島国であったから、ではない。

そうした「科学的説明」よりも、大切なものがある。

「意味」を感じる力。

それが、いま、我々に、深く問われている。

静かに、心の奥深くを見つめてみよう。

いま、我々の心の奥深くには、共通の感覚がある。

この大震災は、起こるべくして起こった、との感覚。

その意味は、目の前の現実を見つめれば感じる。

混迷する政治。低迷する経済。共感を失った社会。倫理を忘れた経営。働き甲斐の無

いつの日か、必ず語ろう

い労働。浮薄な文化。弛緩した我々の精神。

実は、誰もが、そのことを

感じていた。そして、誰もが、予感していた。

いつか、この国は、経済的破綻に直面する。そのとき、我々日本人は、大切なことに、気がつくのではないか。

誰もが、そのことを、心の中で予感していた。

しかし、この感覚の中に、すでに潜んでいた、甘い認識。

二〇一一年三月十一日。何が起こったか。

政治、経済、社会、文化のすべての破綻を遥かに超え、空前の危機がやってきた。

一瞬にして失われた三万人にも及ぶ尊い命。いま、誰もが、この事実の前に、言葉を失い、立ち尽くしている。しかし、この最も痛苦な時

期だからこそ、我々が、自らの心に深く問わなければならない、大切な問いがある。

この方々の尊い命は、なぜ、失われたのか。

この方々は、その尊い命を賭して、我々に、何を教えてくれたのか。

その問いである。そして、その答えを、我々は知っている。

この日本という国は、生まれ変わらなければならない。

この日本という国は、永く続いた混迷の時代を超え、素晴らしい国へと、生まれ変わらなければならない。

そのことを、三万人にも及ぶ方々に、尊い命を賭して、我々に教えてくれた。

されば、いま、我々は、一つの思いを、心に定めなければならない。

それは、これから何十年の歳月を経ても、決して風化するのではない、一つの思い。いつの日か、我々は、必ず、語る。

あのとき、この日本という国の、素晴らしい再生が始まったと。

二〇一一年三月十一日。

あの日、三万人にも及ぶ人々が、その尊い命を賭して、我々に、願いを託してくれた。

そのお陰で、その尊い命のお陰で、我々は、立ち直ることができた。

あの永く続いた、混迷の時代を超え、この日本という国は、素晴らしい国へと、再生することができた。

いつの日か、我々は、そう語ろう。

いつの日か、我々は、必ず、そう語ろう。



田坂広志

[多摩大学大学院教授
シンクタンク・ソフィア
バンク代表]